



Title	西洋「探索」と中国（1）
Author(s)	松沢, 弘陽; MATSUZAWA, Hiroaki
Citation	北大法学論集, 29(3-4), 133-166
Issue Date	1979-03-12
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/16264
Type	departmental bulletin paper
File Information	29(3-4)_p133-166.pdf



西洋「探索」と中国(一)

松 沢 弘 陽

はじめに

西洋の衝撃に迫られた徳川幕府は二世紀半にわたる祖法を大きく更めて、西洋諸国との外交関係を取り結んだ。幕府は、在外使臣制度を創設するまでにいたることなく倒壊したが、西洋諸国との和親・通商条約の締結後倒壊までの十数年の間にいくつかの外交使節団や留学生団を西洋世界に送った。祖法放棄と開国というラジカルな政策の転換の背景には、一八世紀後半以降、とくに一九世紀に入って進んだ西洋世界への視圈の拡大という事実がすでにあつたが、このような西洋世界の中心に赴いた直接接触の蓄積は、西洋世界の認識を急速に深めさせることになった。

このような幕末の西洋経験と西洋理解の発展については、研究の歴史はまだ新しいが、すでにいくつかのすぐれた業績が現われている。けれどもまたそのような研究の中には、一つの問題が共通しているように思われる。つまりそこで、東アジアの中国文化圏に属する日本に西洋の衝撃が打ちこんできて、日本の世界像を転換させるにいたった

過程について、もっぱら日本と西洋諸国との交渉や西洋観の転換という半面に注目され、他の半面、すなわち西洋の衝撃を受けとめて新しい西洋観を展開してゆく過程に、中国の存在やその思想的影響がどのように介在したか、しなかつたかという問題、またこの過程で中国観がどのように変化しあるいはしなかつたかという問題、にはほとんど関心が示されていないのである。他方、日本における中国観の変遷という問題についての研究は、西洋観の発展についてのそれよりも、むしろ早くから進められて来たが、研究のこちらの流れの場合にも、幕末におけるアヘン戦争観についていくらかの研究がなされているのを別とすれば、日本の中国観をたどるといふ仕事は、せいぜい清仏戦争当時のそれからスタートされるのが一般だった。

研究におけるこのような一面性や空白は、ある程度まで、この当時の歴史の過程そのものを反映しているといえよう。一八五〇年代初頭から、幕府はそれまでの「夷狄」諸国との間に次々に和親・通商の関係を取り結んでいったのに反し、中国および朝鮮との関係は、それぞれ「通商」および「通信」という従来の「大君外交」の祖法の域にとどめられていた。⁽¹⁾ 日本が両国との間に、その内容における問題性は別として、ともあれ西洋諸国との関係における同じ「万国公法」による外交関係をとり結んだのはそれぞれ一八七一年、一八七五年に至ってであり、在外公館の交換はそれよりさらに遅れた。この間中国との間でなされた、同じ時期における西洋諸国とのそれに多少とも比較しうる交渉は、せいぜい一八六二年、幕府が貿易調査のため千歳丸を上海に派遣したという一こまにとどまるだろう。⁽²⁾ 朝鮮との間には、明治新政権の成立をまつて、多分に攻撃的な意図を背景として尋交の企てがなされるまでいくらかの新しい動きはあったが、実を結ぶまでにいたらなかった。

このような西洋諸国との関係における革命的な変化に対応するような、新しい関係がアジアの隣国との間には存在しなかつたという一面、だけをとって考えれば、先へのべたような、この時期の日本の国際関係の研究におけるバラ

スの喪失と空白も無理からぬことであろう。しかし外交関係の変革や他国を理解しようとする強い関心が、世界の方に対しては存在し、他のある部分についてはほとんど存在しなかったという両面を、一つの構造としてとらえれば、そこには近代日本の国際関係を通じる大きな問題の原型というべきものが現われているといえよう。さらに、この時期に西洋諸国に赴いた人々の関心は、たしかに西洋世界に集中していた。けれども、未見の西洋世界に始めて接するという最初の局面において、彼らが抱いていた西洋についての予備知識は、中国からの強い思想的影響の下に形成されたものだった。また、西洋探索の旅の途中、彼らは恐らく予期せぬ所におけるそれを含めて、中国および中国人に出会うに至った。そしてこの場合、西洋世界が彼らに開いて見せた部分と、彼らがそれを通じて中国をうかがった部分とは、それぞれの世界におけるほとんど対蹠的な部分だった。こうした意味で彼らは、熾烈な西洋世界「探索」の志の副産物として中国をも知るに至ったのであり、かつ、彼らの中国像の形成は、大胆な単純化を敢てすれば、彼らの西洋像の形成の裏返しという傾向を示していたのである。

中国文化圏に属した日本において、世界像の基本的な枠組を提供したのは儒教の華夷観念であった。いうまでもなく華夷思想は中国に生れ、中国を世界の中心とする世界像だったから、それが日本に受け入れられるためにはさまざまな修正と変容をこうむらねばならなかった。³⁾幕藩体制の成立と前後して、明朝が滅亡し満州族の征服王朝である清朝が中国を支配するにいたったことも、中国を中華とする世界像が成立つ上での障害となった。こうした事情とあいまって、徳川幕府は、中国に対する政策を従前の武家政権のそれから一変した。すなわち中国を中華とする冊封・宗属の関係を否定し、朝鮮・琉球を「通信之国」、中国・オランダを「通商之国」とする「大君外交」の確立がこれである。⁴⁾しかし、このような問題に対応するための修正や変容はありながらも、徳川日本の世界像の基本的な枠組とな

つたのは華夷観念であり、とくに幕末にいたって、それまでほとんど意識されなかつた西洋諸国の存在がクローズ・アップされて来た時、それは「洋夷」としてうけとめられることになった。より早い時期に日本における華夷観念の受容につきまといつた問題の大きな原因の一つは、中国を中華とした場合の日本の位置づけ——日本が「東夷」ないし小国となることを受け入れるか否か——いわば中国⇨日本の相對關係にあつた。しかし幕末にいたって「異國」一般の中から英・露・米といった諸国の姿が浮かび上つて来た時、日本における華夷観念の問題は、日・中の關係において中華とは何であるか、から、日本に迫る西洋諸国を目のあたりにして、夷狄とは何であるかを問う方向へと移つてゆく。幕末に西洋世界の「探索」に赴いた武士の間には、しばしばこのような華夷観念が脈うっていた。しかも、華夷観念は、「聖道」の行われる中華を基準として夷狄の観念を立てるものであり、中華は、幕末においても、何らかの形で中国を含んだものだった。したがって、西洋世界の本土に赴いてその現実を眼のあたりにした人々が夷狄の観念とその実態との乖離に衝撃を受けるにいたつた時、そうした衝撃はしばしば、中華観念や中国像にもはねかえることになった。幕末の日本が西洋の衝撃に接するという出来事は、思想的真空状態の中で起つたのでなく、このような意味で中国の存在と結びついた、華夷観念という思想的雰囲気が充満した中で生じたのである。

さらに中国は、日本に対して華夷観念という形で世界理解の基本的な枠組を提供したばかりでなく、日本に一步先んじて西洋の衝撃に接することによって、西洋列強の実態とそのアジア進出の動向について、最新の生々しい情報を伝えた。アヘン戦争と清朝の敗北という東アジア世界の伝統的な秩序をゆすぶる事件については、早くから風説書や伝聞によって伝えられ、幕藩体制の支配層に中国の危機がやがて日本にも波及せざるをえぬことを予想させ、両国の「唇齒輔車」の關係を意識させるにいたつた。けれども中国は、西洋の衝撃とそれがもたらすものについて自ら経験した事実によって日本に教え、日本の支配層にとつての「殷鑑」となつただけではなかつた。アヘン戦争の敗北とい

う事実をふまえてその経験を思想的に総括し、新しい進路を模索する中国の先覚者の企ては、ある意味でそれが生まれた清朝中国や李朝朝鮮におけるよりも積極的な反応を、日本の識者の間に見出した。魏源の『聖武記』(道光二二(一八四二)年)、『海国図志』(五〇巻、道光二四(一八四四)年。六〇巻、道光二七(一八四七)年。百巻、咸豊二(一八五二)年)や徐繼畲の『瀛環志略』一〇巻(道光二三一二八(一八四三—四八)年)、がそれである。佐久間象山は『聖武記』に接した感動を「ああ、予と魏とは、おのおの異域に生れ、姓名を相識らざるに、時に感じて言を著すは、同じくこの歳にありて、その見るところも、また鬪合するものあるは、一に何ぞ奇なるや、真に海外の同志といふべし」(『省偏録』)とのべたが、幕末に西洋世界の「探索」に赴いた「有志者」たちにとってこうした書物は、予備知識を提供し、また現地における彼らの見聞を整理する上での最大の手引きとなった。それは、あたかも後の時代に「洋行」する人々が携える『ベデカ』や『ミシュラン』のような役割を果したのである。

なお、これらの著作とともに注目には値するのは、在華西洋人宣教師の中国語著作である。一八三〇年代から、とくにアヘン戦争以後、香港や上海、寧波等の条約港を中心とする宣教師たちは、中国人を啓蒙するために華文の書物や新聞、雑誌を次々に刊行し、その多くが幕末の日本に輸入され、また沢山の和刻を生んだ。こうした著作は、著述・刊行の場所が中国の中の西洋の植民地や条約港であったばかりでなく、その内容においても、中国固有の文化・思考様式・価値体系を念頭におき、それに即しつつ、西洋世界とその文化を紹介するというアプローチをとっており、二重の意味で、中国に食い入った西洋ともいうべきものだった。『地理全志』(英国宣教師、慕維廉、William Muirhead 著、咸豊三—四(一八五三—五四)年、上海刊)、『地球説略』(米人宣教師、律理哲 Richard R. Way 著、咸豊六(一八五六)年、寧波刊)のような著書や、『遐邇貫珍』(一八五三年創刊、香港)、『六合叢談』(一八五七年創刊、上海)といった雑誌は、『海国図志』や『瀛環志略』と同じように、日本に舶載されると間もなく和刻されて広く読ま

れ、西洋世界の敵情偵察に赴く「有志者」たちにとつてのガイド・ブックとして大きな役割を果たした。彼らはこうした出版の背景の一つである英華書院 (Anglo-Chinese College) についても夙に知っており、香港に寄港すれば何はさておきここを訪れた。欧米宣教師の手になるこのような著作は、読む者の視野を西洋と中国との両方を含む広い世界に向つて開き、それについての最新の情報を伝えるとともに、中国を西洋の側から見るといふ視座を恐らくきわめて自然の裡に用意してゆくことになつたのであり、こうした意味で重要な役割を果たした。⁽⁶⁾

このような中国産ないし中国経由の知的装備を身につけて、西洋世界に向つた人々の関心は、自国にとつての脅威の源である夷狄の国々に集中していた。しかし、彼らが相次いで西洋に渡つた一八六〇年代は、中国と西洋との関係が大きく変り、西洋勢力が中国に食いこむのと併行して、中国人が西洋とその植民地の各地にひろがってゆく時期だつた。その結果西洋「探索」の旅に出た武士たちは、その途上、しばしば予期せぬ所で、中国および中国人に對面し、また中国と西洋との関係について眼のあたりにすることとなつた。しかも、このような彼らにとつて中国の窓となつたのは、巨大な中国社会のきわめて特異な部分であり、そのことは、自から彼らの中国像の変化の方向に微妙なしかし重要な影響を与えるようになった。

一八六〇年代にアメリカ・ヨーロッパに渡つた使節団・留学生団は、ほとんど例外なくアヘン戦争の結果開かれた英国の直轄植民地 (クラウン・コロニー) 香港、条約港上海に寄港して、初めて中国本土に接した。彼らの船はさらにシンガポール・ペナン等英国の海峡植民地を辿つていったし、時にはオランダ領東インド、フランス第二帝制に侵略されたサイゴンにも寄港することがあつた。それらの地域には、西洋勢力の進出のはるか以前から、華南の人々が華僑として根を張っており、西洋の植民者たちは、彼らと角逐しながらこれらの地域に植民地支配を確立したのであつて、これらの植民地に寄港した人々はそこで華僑社会に接することになつた。さらに華南の流亡農民を中心とする

中国人口の海外流出は、一九世紀前半には自由移民という新しい形で砂糖きび栽培のためハワイに、金鉱開発や鉄道建設のためにカリフォルニア（旧金山）に大量のはけ口を見出した。こうしてアメリカ行の一行はホノルルやサンフランシスコで、西洋社会の中に入りこんだ中国人社会を知った。さいごに十数年にわたる太平天国の戦禍はこのような人口の海外流出に新たな圧力を加えるにいたった。安居と職を求める難民は既にふれたような華僑や移民をたよって、東南アジア各地からハワイ・アメリカ本土にまで流れ、中には長崎移住を望む者も現われたし、そのような難民の中には資産のある読書人も加わっていた。西洋「探索」の途上にある武士たちは彼らから中国の動乱について生々しい情報を聞くことになったのである。

幕末・明治初期の日中両国が未だ外交関係を樹立しないいわば国交の端境期に、このような形で中国に接し、中国像を変化させるにいたった人の数はおそらくそれほど多くはない。外交使節団や留学生団のメンバーの総数はかなり上るが、積極的な関心を抱いて中国および中国人に接し中国について考えたのは、「志士」「有志者」として自己意識したその中の少数だったように思われる。このような中国経験・中国理解がその後の日本にどれほどの影響をもったかも、明らかでない。それはあるいは微々たるものだったかもしれない。しかし、日本をめぐる国際関係の激変の一コマ——特異な時期——における、特異な形の中国経験と中国理解は、それらのその後の展開に照す時、その実的な影響をこえる重要な意味を帯びていることがうかがわれる。小稿は、幕府倒壊までの、幕府派遣の使節・留学生団を手がかりとして、こうした問題に近づくところみである。

万延元（一八六〇）年、日米通商航海条約の批准書交換のためにワシントンに派遣された新見正興以下の使節団は、幕末の西洋行の第一陣だったばかりでなく中国および中国人に接した最初のグループでもあり、その中国経験の量と質も一八七〇年に入って明治新政権の下で中国との間に外交関係が結ばれるまでの時期において、最も豊かなものだったといえよう。それはすでに述べたように、この時期における事実上唯一の遣清使節だった千歳丸の上海派遣に二年先立っていたし、西洋世界及び中国との接触のしかたにおいて、千歳丸の一行のそれや、それ以後の西洋への使節団や留学生団の間できわだった特徴を示していた。

この使節団の目的地はアメリカ合衆国であり、往復の旅は、ハワイ・カリフォルニアを経てパナマ地峡からワシントンに赴き、大西洋を東に廻って、アフリカ・蘭領東インド・香港に寄港して日本に至るというコースを通った。彼らは期せずして、カリフォルニア・ハワイにおける一九世紀に入ってから中国移民、蘭領東インドにおける東南アジア最大の華僑社会、アヘン戦争で割譲された英国植民地香港と、太平洋をめぐって、西洋勢力が中国を蚕食し、逆にこれと裏腹の関係で中国人が西洋世界の中に食い込んでゆく、様々な局面を通観することになった。あたかも、華北ではアロウ戦争第二次英仏連合戦役たけなわで、連合軍が北京に迫ろうとし、華中では太平天国軍が長江下流一帯を制圧して条約港上海を脅かしており、西洋の衝撃に迫られた中国の危機的な様相があらわな形で示されていた。そして、こうした西洋と中国の関係を理解する基準を提供したのは、一行の多くに、ひとりひとりの人間としての経験を通じて、古い世界像の転換を迫ったアメリカ合衆国だった。

このアメリカは一行の人々によって、はつきりと、西洋諸国の世界における「新国」として位置づけられていた。

アメリカのカルチュアと社会構造における開放性——open society——や平等主義は、アメリカが「新国」であることから来るものであり、それは同じ西洋世界の中でもとりわけアメリカにいちじるしく、アメリカを他の西洋諸国から区別するものだと考えられた。それは、しばしば日本や中国の対外的・国内的なカルチュアや社会構造といちじるしい対照をなしていた。異邦人でありながら、この西洋世界中の「新国」において、予想に反して真率で親切な交わりに包まれた人々は、このようなカルチュアを単純に「夷狄」のそれとして貶下することは出来なくなった。同時に、そのような価値観の逆転は、中国や日本のカルチュアに対する彼らの見方にはね返ってゆくことになった。さらに、アメリカは、本国内に巨大な黒人人口をかかえている点においても西洋世界の中で特異な存在であり、南北戦争前夜のアメリカにおける黒人の状態は武士たちの心に強烈な印象を与えた。「共和」の「新国」アメリカが古き「中華」にかわって、世界理解の基準の位置に上ってゆくのにあいともなつて、アメリカ社会およびアフリカにおける黒人の存在が、中国人を理解し評価するさいの基準になる傾向が生れて来るのである。

最後に、西洋派遣グループの主体の側の問題としては、この遣米使節団が、幕末の使節団・留学生団の中で身分制社会の格式を最も重んじ、実務的には冗員同様の従者や召使を最も多く擁していたという事情があった。逆説的にも、そのような〈冗員〉の存在が、使節団の西洋経験・中国経験を豊かにする一因となった。つまり、このような従者や召使のポストが、積極的に西洋世界を「探索」する志と能力とをもつた「有志者」たちに参加の機会を与え、召使や従者の数が多かったからして、彼らは雑用に使われる立場でありながら、少くともその後のグループに比べると割合に「探索」の時間に恵まれていたのである。

以下、一行の行程を辿りつつ、彼らの中国経験の記録を抄録し、その上でいくつかの問題点をとり上げて見よう（記録は全て邦暦で示されているので、検索の便宜上日付はこれによる）。

安政七年一月一九日 別艦威臨丸浦賀出帆。

二二日 ポーハタン号横浜出帆。

二月七日 威臨丸香港からサンフランシスコに向う中国人移民船フロラ号に遭う。

二月二六日 威臨丸サンフランシスコ到着。

二月一四―二七日 ポーハタン号ホノルル碇泊。

ハワイ諸島には、一八五〇年代に入つて砂糖きび農園の労働者として中国人が迎えられるようになり、それら中国人移民の中にはかなりの成功者が現われた。彼らと孫文を中心とする中国の革命運動との関係については、ここにもべるまでもないだろう。

この地の人口についてふれたいくつかの手記は、ハワイ諸島全土の人口七万数千ないし八万の中千から二千、ホノルルの人口八千の中二五〇、あるいは五千の中五〇〇の中国人が存在すると記している。器物は全て欧米および中国から、米は中国から輸入されている。ハワイの商業全体の中の中国人移民の比重について、人によって評価は異なるが、一致して中国人が商業に携さわっているとのべている。事実、初めて踏む異国の地を「探索」の志と好奇心のかたまりの如く徘徊する武士たちは、しばしば中国人商店にぶつかり、さっそく飛びこんで筆談で靴を買う（玉虫諠茂『航米日録』二六頁⁽⁷⁾）者も現われた。なかでも彼らの数人が一様に強い関心を示したのは、一人の中国人薬商だった。ホノルル上陸の初日に既にこの人に出会った、監察小栗忠順従者・熊本藩士木村鉄太は、その始終を次のように記している。

「市井ヲ徘徊シ、逐ニ清人晋濟堂ヲ訪フ。是レ南京ノ一儒生ニシテ、乱ヲ避ケ、家人弟子ヲ率ヒ、來住スル者ナリ。医術ヲ業トシ、売薬ヲ生トス。博学恵ヲ好ム。土蕃其恩ニ服ス。茶烟菓子ヲ勤ム、次序本邦ニ同シ。筆談流ガ如ク、大率世ノ降ヲ感シ、俗ヲ移ラ曠ク而シテ本邦（一日本）ノ隆盛ヲ羨モ、亦宜ナル哉。詩作卷ヲ為シ、述書頗ル多シ。皆其慷慨ヲ見ス」（『航米記』四二頁⁽⁸⁾）。

一行の日記に残されたところでは、木村の後、一八日には正使新見正興従者・仙台藩士玉虫誼茂がこの人潘麗邦を訪れて、筆談を詳しく記しているし、それによれば潘は前日一七日には幕府寄合医師宮崎立元に会って筆談しており、その日は潘の方から宮崎を訪問するつもりでいた(玉虫『航米日録』二二九—二三六頁)。翌一九日にも逸名の「従者」が潘麗邦を訪れている(『亜墨利加渡海日記』三二二頁)。一九日午後一行はホテルを引き払って乗船し、以後特別の事情がない限り上陸を許されなくなり、おそらくそのせいであろう、中国人との交渉の記録は一九日のそれ以後見られない。しかし「落涙シ喜ヒ煙草酒杯等ヲ与ヘ頻リニ我徒ヲ愛」(『亜墨利加渡海日記』三二二頁)し、「慷慨ノ気多ク、共ニ談ズルニ足ル……互ニ筆語相接シ時ヲ移スニ至ル」(玉虫『航米日録』三二二頁)といった華商との交歓の経験は日本武士たちに忘れられぬものとなったようである。何が彼らの心をこのように結びつける絆となったのか、については後にふれたい。

安政七年三月九日—万延元年(改元)三月一八日 ポーハタン号サンフランシスコ碇泊。先着の別艦威臨丸は引続き閏三月一九日まで同地在泊。

アメリカ本土への中国人移民は一八五〇年代初頭に始まり、一八六〇年までのその人口は約三万五千人で、主としてカリフォルニアの金鉱、農園、鉄道建設、家事労働、洗濯業などに従事していた。日本武士たちもゴールドラッシュを背景としたカリフォルニアの発展と中国人労働力の流入の実態をかなり正確にとらえていた。彼らの眼に映じたサンフランシスコの中国人社会は、

「当時(サンフランシスコの)人口十万人ニ下ラザルベシ屋敷一万八千軒ニ及ヘリ其中清国ヨリ転移スル者千人数五百人男子ハ開店傭夫努僕トナル者不少女子ハ遊女或ハ雇女トナル」(『亜墨利加渡海日記』三七頁)。あるいは「仏蘭西・英吉利・和蘭等ノ人ノ此ニ転居スルモノ最多ク、支那人モ亦一万五千人許アリテ、別ニ巷ヲナシ唐人街ト名ヅク、或ハ傭作シ、或ハ奴僕トナリ、或ハ礦夫トナリ、或ハ小商店ヲ開ク。能豆腐ヲ製ス、味甚ダ美ナリ。扱支那店ニ至レバ夫妻出テ茶菓ヲ勸ム、我邦俗ニ同ジ」(玉虫『航米日録』五八頁)。

といったプロフィールで大体一致していた。サンフランシスコの中国人人口の見つもりでは千余人（益頭尚俊『亜行航海日記』一八一頁⁽¹⁰⁾）といったところから数万人（名村元度『亜行日記』二一六頁⁽¹¹⁾）まで分れているが、移住中国人の職業構成については同じように見ていたといえよう。

こうした中国人の間に武士たちは積極的に入っていたようで、芝居を見物して「言葉ハ通せされとも其所為大ひに本国に類する故に誠に誠におもしろく見物いたせし由」（柳川当清『航海日記』二四七頁、なお、佐野鼎『万延元年訪米日記』二六頁⁽¹²⁾）という者も現われたし、咸臨丸座乗の軍艦奉行木村喜毅従者・中津藩士福沢諭吉が、中国人子卿の著した中・英辞典『華英通語』を購ったのもサンフランシスコの中国人商店においてだった⁽¹³⁾。しかし、この地に渡って来た中国人は、単に仕事と生計の資を求めて来たというだけではなかった。副使村垣範正は「支那町」形成の背景に「近来、清朝争乱絶へず、此国人避て多く移り……」（『航海日記』一〇九頁⁽¹⁴⁾）と、太平天国の動乱の存在を指摘していた。他方、日本武士の方も中国街の豆腐や芝居を楽しんだり、中国人のもてなしに故国を偲んだりするだけだった訳ではない。おそらく中国人の中でも、太平天国の動乱を避けて来た読書人との間でのことと思われるが、ホルルでの藩麗邦とのエピソードに類する交渉があったようである。

御目付日高為義の手記によれば「此地支那人多く、御国之人を暴（――慕）ひ呼入候間、筆談を好ミ書を以て通し候を、土人江対し自慢なる様子也」（『米行日誌』七頁⁽¹⁵⁾）という交渉が見られた。福沢とともに木村喜毅の従者となつた尾道の蘭医長尾幸作は、咸臨丸の出帆前日何昌球という中国人が尋ねて来て数々の餞別を贈られたことをのべているが、こうした関係も日高の記すような交渉の中から生れたのではなからうか。その中で何が語られたか。ここでは、玉虫誼茂の友人が「サンフランシスコ滞船ノ節支那人ト筆談シ、彼殊ノ外鄭重ニ待遇シ、遂ニ花旗国ノ事情ヲ吐露」（玉虫『航海日記』二三八頁⁽¹⁶⁾）して、アメリカカの「術中ニ陥」ることを避けるように忠告されたという記述だけ

をあげておこう。中国人がなぜこのような忠告をするにいたったのか、日本武士のそれに対する反応は、といった問題については後にふれたい。

三月一八日、使節一行を乗せたポーハタン号は威臨丸を後に残してサンフランシスコを出帆、威臨丸はハワイに寄港して日本へ直航した。一方使節一行はパナマを経て大西洋岸に出、米艦ロアノーク号に移って閏三月二五日ワシントン着、任務を果した後五月一三日米艦ナイアガラ号に乗ってニューヨークを出帆した。彼らはサンフランシスコを去った後八月一七日バタビアに入るまでおそらく中国人には全く接しなかつただろう、中国や中国人についての記述はどの日記にも見出せない。この間使節団一行はワシントンを始め各地でアメリカ朝野を挙げた歓迎に接し、それに包まれて彼らの多くは自己の夷狄観を、大きく変えることになった。こうした日々の中で中国についての記述が現われないのはきわめて自然といえようが、その中でただ一つ、小栗忠順の従者福島義言の『花旗航海日誌』では、ワシントン市民の歓迎に包まれた感動とそれまでの彼らの西洋観についての深刻な反省との記述に続いて、ほとんど唐突に、西洋人の中国観と中国人に対する態度が紹介されている。多くの米行日記類の中には、後から手を入れたものもめずらしくないから、この一節も、ひよっとするとワシントン滞在中に書かれたものではなく、後からの省察を書きこんだものかもしれない。しかし、そうだとしてもアメリカ経験を通じる夷狄観の変化と、その中国観への影響との関連をよく示しているので、長文だがその分析は後にゆずって、紹介だけしておく。

「○此度兩國和親ヲナスニ於テハ、其民ニ至迄、残スタカヘニ親族ノ如クセントラ欲ス、故ニ我輩ニ実（一入）魂セサレハ、無人ニ非スト云ル意ナリ、既ニ。ローノーク。船（一米艦the Rannok）ノ士官等、我輩ニ魂（一懸）意ナセシ者ニ逢フトキハ、彼方ヨリ礼ヲナス、市人皆是ヲウラヤムコト甚シ○又旅亭ノ窓下ニ毎日男女群集ス、……市中ヘ免カレテ歩行ナス時ハ、各争ヒ我分ノ家宅ヘ伴ハントス、況ヤ此方ヨリ行ニ於テラヤ、其喜大方ナラス、近隣人ヲ集、茶菓ヲ点ジテ饗応ナス、余ハ是ニテ日本人ヲ宗敬スル

ヲ知ヘシ。

柿（一抑）西洋人ノ支那人ヲ輕蔑スルコト、亜仏利加ノ黒鬼ヨリモ甚シ、其故如何トナレハ、十ヶ年前搗（一鴉）片煙ノ事件ヨリシテ英國支那ヲ攻、清兵是ヲ防クコト能ス、遂ニ和睦ヲ乞フ、償金ヲ出サントト約ス、此ニ於テ右ノ条約ヲ結ントシテ英使北京府ニ至ル、支那人伏勢ヲ半途ニ設、是ヲ討、其首ヲ斬、搗（一梟）木ニ掛ルニ至リ、夫ヨリ後、英人其精（一猶）疑ヲ悲ミ、再兵ヲ調シテ是ヲ討、夫ノミナラス、英人奴僕ニ備スル所ノ清人、金銀ヲ盜取、或ハ市民ニ徘徊スル西洋人ヲ殺害スルコト度々ニ及、其故歐羅巴人彼國ヲシテ無礼無仁ノ夷狄ト云、其惡コト仇敵ノ如シ、依テ支那人ハ各國ニ渡商売ナス者迄、此侮屏（一辱）ヲ受トナリ。

○愚案スルニ、日本ニ於テモ歐羅巴人ヲ犬馬ノ如ナス者、十二七八、或ハ彼ヲ切害ナス者アリ、未タ甚キニ至スト云ト雖モ、終ニハ支那國ノ如キニ至ント眼前ナリ、前車ノ覆（一覆）ルヲ後者ノ戒トナスヘキノ第一ナリ、扱西洋人ハ然ラス、外國人ヲ患ミ、親コト一族ノ如シ、就中米利堅ハ新國ニテ、人質殊ニ温和ニシテ、其深意ハ分チ難ト雖モ、一面シテ体正直ト見ユ、若日本人ニ是ヲ見ルトキハ、何ソ害心ノ起ル者有ンヤ、且此國ハ高官ノ者ト雖、猥ニ下人ヲ侮リ、或ハ己カ權威ヲ振フコトナシ、夫故平人常ニ高官ニ歸フコトナクシテ、國富、民泰ニ、枕ヲ泰山ノ安ニ置ク、若クハ日本ノ士庶（一志無）ク愚昧（一昧）ノ輩此風俗ヲ見ルトキハ、恐ク必ス彼ニ志ヲ傾ルニ至ンカ、是皆誠実ノ至ス所ナレハ、大丈夫モ其志ヲ動ンカ、此度日本ノ使節□（一從？）者總計七十七人、大抵ハ彼ヲ憤リ惡ノ士ナリ、然ト雖モ、其実ヲ知ニ及ンテハ、各先非ヲ悔タリ、必シモ異人ヲシテ犬馬ノ如ク賤シ、憐ノ如ク耻シムルトキハ、彼ニ不仁不義ノ名ヲ得ン、豈愚ノ甚シキニ非ヤ（『花旗航海日誌』三三二—三三四頁）

この文章の第一段、アメリカ人が日本人に「実魂」し「宗教」しようとしているという見方の背後には、アメリカの人と社会との接触がきわめて限られて表面的・断片的でしかなく、しかもそのような限られた経験に深く動かされているということがあろう。この両面のギャップから、アメリカの人と社会についてのきわめて好意的なしききわめて主観的な解釈——思いこみ——が生れているようである。アメリカ人の日本人に対する態度にとまどいともいえるほどの喜びと感激をおぼえた時、おそらくそれと全く対蹠的な、西洋人の在外中国人に対する態度と、その差異をもたらしした原因への問いとが念頭に上ったのだらう。第二段でふれられる紛争の記述には、南京条約から同条約改正交渉

・天津条約を経て条約批准交換を理由とする英仏兩國軍艦の行動(一八五九年)にいたるまでの英国の一連の行動と、それに対する清朝軍隊の反撃と華南を中心とする激烈な排英運動などが同一視され混同されているように思われる。しかしここで重要なのは、こうした英中紛争についての情報がどれだけ正確でありまたなかったかということよりは、福島が情報源、や紛争を見る立場の点で西洋のそれに依存し西洋のそれにほとんど一体化してしまっていることだろ。

それをふまえて第三段では日本人のヨーロッパ人に対する態度と西洋人の外国人に対する態度との対比がこころみられているが、福島の世界像の中で西洋世界の冠ともいふべき位置を占めている「新国」アメリカの対外態度は、第一段でのべられた日本人の経験をもとにして見ると見ることができよう。「外国人ヲ恵シ、親コト一族ノ如シ」とか「高官」と「下人」や「平人」の間に隔絶がないといったことは、上下内外の別を欠くという点で、これまで西洋がまさに夷狄たることの証拠として考えられて来た。同じ使節団一行の中でも村垣のような高級官吏は、アメリカ社会の見聞を重ねるなかで、「真実」や「懇親」のみあつておよそ「礼」のないカルチュアに不快といらだちをつのらせ「夷狄」観、「胡国」観を再確認するにいたつていた。これに反し福島ら一行の多くは、第一段にのべられたような嬉しい経験を通じて、西洋に対する評価を逆転し、かえつて西洋人が中国を見るその立場から中国さらに日本をとらえなおすようになっていた。中国は「攘夷」の態度をとっているのだから西洋世界から「無礼無仁ノ夷狄」と見られるのもやむをえぬとし、遣米使節団中の攘夷論者についてはその反省が告白されるのである。

八月一七日 ナイアガラ号バタビア入港、同二七日まで同港及び近くのオンルスト島に碇泊。ジャワにおける中国人移民の商業活動は一六世紀に遡ることができ、一七世紀以来華僑とオランダ東印度会社とはあるいは拮抗しあるいは相互に利用しながら発展して、オランダが東インド会社を廃止して直接統治にふみ切った頃には、華僑勢力も商業活動を中心として確固たる地位を築いていた。

パタビアにおける中国人街と中国人人口については、同一の西洋人の中国語著作によっているらしく、多くの記録にはほとんど同じ表現がある。その一つを引けば、一八五八年のパタビアの人口一萬八千三百の中「土人」八方に次いで中国人二萬五千ヨーロッパ人二千八百の順、「方今パタービヤヲ分ケテ、七州二十四都トス、其第六州ニ支那街アリ、支那人ノ居ル所ナリ、街ノ西南ニ当レリ、街郭極メテ広大、道衢至テ整正ナリ」(益頭『亜行航海日記』一四九頁)。実際には、パタビヤ市街の景況もその中に散在する中国人街の数やそれらが市街全体の中で占める位置も、こうした書物の記述とはかなり食違ふところがあつたようである。「椰(一抑) パターヒヤ港ハ、前文ノ訳書ニ出ス所ハ最大ナル都会ノ地ト思ヒシニ、今ハ眼前ニ是ヲ見レハ、其半ハニ過ス、人家更ニ比櫛ナスコト能ハス……、唯支那人住居ナス所ノミ、マサシク人家比櫛ナシ、又其商家ハ日本ノ風俗ニ近ク、赤キ瓦ヲ以屋トナシ、売物ヲ飾ル様モ殆ト大同小異ナリ」(福島『花旗航海日記』三八八頁)。

中国人街のたたずまいには故国を想わせるものが多かったのだろう、「家作大抵我国ニ同ジ」(玉虫『航米日記』一九七頁)、「其売物ヲ貯フルコト、殆ト日本ノ商家ニ仿仏(一彷彿)タリ」(福島『花旗航海日記』三八七頁)等と記されている。店頭に漢字で商品の名を貼り出し、入口の柱に双聯や額をかかげ、店内に像を祀る商店、文王廟、寺院等。こうした中国街の建築についてあるものは東洋的感覚からである。「結構如何ニモ風雅」(玉虫『航米日記』二〇四、なお二〇一頁)、あるものは西洋建築の壮麗に心をうばわれたのか「其作小ニシテ麗ナラス」(福島『花旗航海日記』三八七頁)と感じ方はさまざまである。街頭で見かける中国人の生活様式についても「支那人もあまた有。笠をかむり、売物を荷ひて歩行むさま、我国風に近し」(村垣『航海日記』二六二頁)と感懐がのべられている。パタビヤ在住の中国人は、このように古くから商業に進出していたが、なかにはオランダ人支配者に労働者として使われる者もいた。オランダ島のオランダ海軍基地を訪れた一行中のある者は造船所の「大工其外の諸職人三百人計有

て各其業をなす何れも史那人なり」(柳川当清『航海日記』三七五頁、なお、勘定組頭、森田清行の『亜行日記』二四七頁をも参照) ということを見逃さなかつた。

ハワイやサンフランシスコの場合に比して、バタビヤにおける中国人勢力が大きくその社会的地位もはるかに高かつたためだろうか、華僑の日本人に対する態度も一だんと積極的だつた。入港の三日後八月二〇日、「旧来の通商の国」(村垣) オランダの総督に表敬訪問をするため上陸した一行が市内のホテルで休憩していると、間もなく当地中国人社会の指導者格らしい一行が使節を訪問し筆談による応接があつた。正副使節の残した記録はこれについてふれていないが、使節自身かさまなければ会見に同席した上級官吏から聞いたのであらう、使節の従者の日記には会談の様様について、あい補う興味深い記述がある。

「暫時過テ支那□□(原文不明) 将官来、使君ヲ尋ヌ、筆談ニテ応接アリ、其口演ニ曰、此度使君万里外ニ使シテ、其無事ナルコトヲ祝シ、又日本人ハ其衣服前朝明ノ風俗有故ニ、本土人ヨリモ慕シクトテ、泪ヲ流セント云フ」(小栗忠順従者福島義言『花旗航海日誌』三八八頁)。「史那人多ク来リ各筆談をなす中に日本人の風俗を見て落涙をなすもの有因て筆を取是を聞に日本の衣類を見て明の代を思ひて遂に落涙に及しと云史那人は何れも我国をしたふよ子にて又史那人の書に日本の武勇甚各世界に高しと云」(新見正興従者柳川当清『航海日記』三七〇頁)。

翌二一日、ナイアガラ号は石炭積込のため、バタビヤの泊地からかなり離れたオンルスト島の海軍基地に移動したが、あくる日には、中国人の客が船に乗つてここまでやって来た。

「支那人碇泊所エニ拾程尋問、文字アルモノ鄰国端ト云者一人姓名ヲ通シ余ト筆談ス」(森田清行『亜行日記』二四六―二四七頁)。
 その次の二三日には、オランダ人の一行に加わつて中国人女性もナイアガラ号を訪れている。使節団の側でも進んで中国人と交わつたものがあつたらしい。二五日オンルスト島からバタビヤの泊地に帰り、その午後上陸した一行の

中には、ついにグループの待合せ時間を過ぎても姿を現さず、「五ッ半時（午後九時）船に帰来しに大に叱を受某生の遅滞せしは支那人と筆問なせしを似ての故也とそ」（佐藤秀長『米行日記』四九九頁²¹）という「某君の従者」のあったことが記されている。これを記した佐藤は外国方御用達伊勢屋平作の推薦で御賄方として使節団に同行することをゆるされた豊後杵築藩士、いわば志願「賄方」であり、「某君の従者」もおそらく同じような志願「従者」の一人で、「探索」の志を抱いて卑賤の役に身をおとしても加わった同志として、同志の人々と行動を共にしていたのではないか。

さらに、地球を東に廻って東南アジアの通商貿易圏の一角にたどりついた一行は、バタビアに寄港する艦船のもたらす伝聞や現地のオランダ語新聞によって、中国本土のかなり新しいニュースを知ることが出来た。八月一五日の「子牌後」ナイアガラ号がジャワ島西端アンエルに投錨仮泊し、居あわせた舟山列島定海港からニューヨークに向うアメリカ商船と交信すると、おそらく深夜のことだったにもかかわらず、玉虫誼茂は、英仏両国が再び大軍を動かして北河から華北に侵入し戦まきという四〇日余り前のニュースを聞き出して記録、これを後で入手した新聞報道によって確かめている。八月一九日、あるいはこの日ナイアガラ号を訪問したアメリカ領事やオランダ海軍士官がもたらしたのか（福島『花旗航海日誌』三八二頁）、一行は洋暦九月二七日（邦暦八月一九日は洋暦一〇月二日）付のバタビヤ刊行オランダ語新聞に掲載された、アロウ戦争第二次英仏連合戦役についての詳細な記事を手して抄訳、何人かがこれを筆写している（福島、玉虫、佐野、益頭、木村）。

記事は洋暦九月一二日付香港ニュースによるもので、八月一二日北塘発進から同二二日太沽砲台攻略、二五日天津入城（——と推定される）にいたるまでの英仏連合軍の行動についての、生き生きとした戦闘概報ないし従軍報道ともいべきもの。英仏側からの観戦であることは言うまでもないが、清朝内部における和平論抬頭の風説まで紹介している。またごく短いがこの年上海を脅かした太平天国軍の圧力が緩和したという記事も附記されている。また同じ日

の日記に柳川当清はこの報道を補うような英仏の中国に対する戦争のアウトラインについて伝聞を記しているが、これもあるいは、同じアメリカ・オランダの訪問者からのものではなからうか。二五日、前述の志願「賄方」や志願「従者」の一団に加わって上陸した志願「従者」の一人木村鉄太もその日の日記に、バタビヤ新聞のアロウ戦争についての記事を引いているが、これも当日の探索の成果だったのだろうか。一行の日記に現われた中国および中国人との交渉はこれが最後で翌々日ナイアガラ号は香港に向って出港する。

アロウ戦争や太平天国軍の推移について、一行が探りえた情報は、おそらく当時の日本において最新・最詳かつ最も正確だったろう。しかし、ここでそのこと以上に注目したいのは、これらの情報が、中国人の側からではなく、おそらく直接間接に、さまざまな西洋人の眼と耳と心を通して伝えられたものだったこと、武士たちがそれを聞き記録するに当って、情報の出所と通路が事実の解釈や歪曲をもたらす可能性について筆を止めて考ようとした様子がかがわれないこと、さらにそのような情報を受けとめる時、日本人自身の解釈らしきものがそれからみついていたらしいこと、である。こうした問題は、一行が香港にいたるとさらにいちぢるしくなるのだが、ここでも、一・二その例を引いておこう。

「当春より史那国と英仏の兩國と戦争有此はじめは史那国におゐて罪なき英の使者を殺害す因て英国の女王大ひに怒り教鞭の軍艦を催し仏國または是に加勢し兩國の軍艦直に北京に資入よつて史那国におゐても大軍を催し防之といふ其中に鞭鞫の勢勇猛にして能く敵を防ぐといへとも英仏の軍に敵しかたく遂に敗軍におよび其所を退陣す因て英人大ひに乱法せりと云仏國は軍令嚴にして諸卒にいたるまで法を犯さずと云此節兩國の軍勢上陸し北京の辺に屯すと云英國は当時強國第一にして其人氣甚た悪しく何國におゐても不法をなす因て各國とも英人を悪むもの多しという又英人常にいう英領は年中昼なりと是諸方に領分有故なり其大言甚た悪むへし」(柳川当清『航海日記』三六五—三六六頁)。

「巴達維亞新聞ニ云。今年春。英吉利。法蘭西。兵ヲ拳テ清ヲ伐ツ。英米船ヲ天津河ヨリ進メ。法兵陸路ヲ行テ力ヲ合セ。向フ所

敵ナシ。……清兵最モ血戦。死者千ヲ以テ計フ。英法ノ死傷少シ。咸豊帝。年二十九。固ヨリ暗弱多病。酒色ニ溺レ。康熙ノ典経ヲ擾乱シ。国家ヲ撫安スル一能ハ弗」(木村鉄太『航米記』三〇四頁)。

前の文章では、アロウ戦争の背景に世界最強かつ最も傲慢にして無法な英国の存在が認められている。遣米使節団の中のかなりの者がアメリカ本土において、アメリカは西洋世界中の「新国」でそれゆえ外国に対してとりわけ友好的だというイメージを抱くようになるとともに、それとほとんど裏腹の關係で、英国は最も危険な侵略的国家であり、日米両国の接近をも猜疑と嫉妬の眼で眺めているというイメージを持つようになった。後者はおそらく南北戦争直前のアメリカにひろがった対英警戒意識を吹きこまれたものと推定され、アメリカ経験を通じて夷狄觀を捨ててようになった人々の世界理解の枠組が、アメリカのその強い影響の下にあることをうかがわせる。問題は、英国についてこのように批判的に見た上でなお、筆者は英中衝突の原因を中国側の一方的な非道とそれに対する英国側の当然の制裁措置に求めているらしいことである。ここに「罪なき英の使者を殺害云々」というのはおそらく、一八五九年六月の太沽事件、あるいはさらにそれにいたるまでの反英運動を念頭においていると思われるが、事態がもつばら西洋の側から理解されていることはたしかだろう。同様に第二次英仏連合戦役のニュースを紹介した後の文章で、中国の敗北にふれつつ、咸豊帝について「固ヨリ、暗弱云々」(傍点松沢)とのべているのも、やはり情報源となった西洋側の見方か、あるいは筆者自身の既成の觀念を反映しているのではなからうか。

九月八日 ナイアガラ号香港入港、同月一八日まで碇泊。

香港は、アヘン戦争の中で一八四一年英軍に占領され、中国敗北の結果、一八四二年、南京条約によって英国に割譲された。以後大英帝国の直轄植民地となった香港は、自由港としてまた軍事的政治的基地として急速な発展をとげた。香港はそれまでの英国対中貿易の門戸だった広東や、南京条約によって開かれた他の条約港と異なり、元來貧し

い漁村しかない人口稀薄の地だった。それが、一八六〇年当時は四、五万人前後に達するという急膨脹をとげた。人口の主力は香港割譲後中国本土から流入した中国人、その多数は貧困と太平天国の戦禍にいためつけられた華南の流亡農民だった。このような成長の途上にあつた香港社会は当時まだ不安定で漸く六〇年代を通じる商業・貿易の安定と発展の時期に入ろうとする過度期だった。

使節団一行は、植民地香港のこうした歴史と性格についてはかなり一致した正確な認識を示していた。その中国人社会については一八五二年の総人口三万七千余の中欧米人五百余のみ、残りは中国人という数字が引かれ(木村『航海米記』三二〇頁、佐野『訪米日記』一六四頁)、「支那人の居家は十分の八」(佐藤秀長『米行日記』五〇二頁)「清人多ク外方人ハ二十ノ三ニ過ギズ」(筆者不明『細川藩航行日記』²⁸)とされるところから一行の理解のほどはうかがわれよう。その景観は

「市囂風致頗我邦ニ似タリ」(木村『航海米記』三二二頁)、「店の設け略我邦に彷彿たり」(佐藤『米行日記』五〇三頁)、「其売物ヲ飾ルコト、日本ニ彷彿タリ」(福島『花旗航海日誌』三九四頁)。さらに「酒食茶煙略々本邦ニ近」(木村『航海米記』三二三頁)、「清朝人在ルニヨリ豆腐ヲ製シ出ス正月横浜ヲ離レテ今月初メテ豆腐ヲ味フ……外国ニハ絶テ豆腐ト云モノナシト云フ……爰ニ来リテ衆皆本国ニ還リタル心地シ甚タ怡フ」(筆者不詳『米里堅紀行』)。

ということにもなった。

しかし、中国本土の一角で中国人口が圧倒的多数であるにもかかわらず、香港社会における中国人の社会的地位は、パタビヤにおけるその場合に比較しても一そう難しいものだった。ヨーロッパ人の商館や住宅の堂々たる経営に対し蝸集した中国人街については「其家作小ニシテ麗ナラス」(福島『花旗航海日誌』三九四頁)。「支那人の居家は……多く木材を用ひ板を以て四壁となす瓦を以て屋を掩て甚粗少」(佐藤『米行日記』五〇三頁)、「支那人居宅・

説 酒店ハ鄙陋且矮シ、総テ山下ニ建有リ、鎮台（―香港総督）ノ館ハ街市ノ上ニ在リ」（名村『亜行日記』二七二頁）
という印象は多くに共通していた。この場合、木と瓦で出来た家屋は「甚粗少」だという判断は、「煉瓦石製」の「洋人家屋」との比較でなされており、「家作日本家作ニ彷彿タレドモ合衆国貨店ニ比スレハ汚穢ナリ」（森田『亜行日記』二五七頁）とされたように、住居のような日常の事物についても、西洋を基準とするように、美感覚が転換しているらしいことに注意しておきたい。さらに、中国人の中にはこのような住居にも住まぬ者が多くいた。ナイアガラ号は入港と同時に小舟を住居とする貧しい人々にとりかこまれた。

「支那の貧人多く有て小舟に乘し滯泊船の側にいたり船より落或は捨なとする品を拾ふ乞食有其中に甚た哀れなるハ大サ巻間計の小舟に兄弟三人にて乘し来有兄ハ十七歳弟七歳妹四歳計にして両親ともになく夜ハ此小舟を海岸につなきて休息し朝ハ未明々来て食を乞我朝人各是を不便におもひて種々の品をあたへ遣す船中に菓子を与へし人あり然に此菓子を頂き取て能き菓子を妹に与へ其次を弟に遣し兄ハ菓子粉になりたるを食す各是を感心す」（柳川当清『航海日記』三八三頁）。

「船の表に水夫の圓あり此処より船中の雑物を棄つるを土人終日二間計の小舟に乗り来て網（―網？）を以て是を受け蒸餅の如きは是を食料となし野菜の如きは鶏豚を養ふに供すと之我國の乞食に均しき者ならん多くは婦人也」（佐藤『米行日記』五〇四―五〇五頁）。

傾斜面に作られた市街で交通にはもっぱら駕籠が用いられているが、「昇夫ハ皆支那人ナリ」（玉虫『航海日記』二一六頁）ということも見逃されなかつた。

けれども、中国人の一部――少くとも文字を解する人々――の日本人に対する態度は、バタバヤやサンフランシスコの中国人のそれと共通していた。「我徒ノ者市中ヲ徘徊ナセハ支那人群ヲ為前後ニ従行シ筆談ヲ以テ言語ヲ通セントシテ我徒ヲ遶リ団ム」（無名氏『亞墨利加渡海日記』六九頁）。「清人動モスレバ己ノ家ニ招キ筆問シ文字相通シ言語通サル而已ト云共ニ聖教ヲ説キ兩國ノ人種同事ヲ言テ喜ヒ且ツ我等ノ長キ袖ヲ採テ善哉ト云テ古風ヲ想ヒ羨ミ

ヌ」(『細川藩航行日記』)。これはいずれも彼ら「従者」クラスが香港上陸を許された初日の記事である。中国人が日本武士の長袖を手にとつて感動するという行為を、武士たちはバタバヤで既に経験し記録していた。このような行為についての記述には、それをする中国人の自己意識と、おそらくは更に日本武士の側の中国人理解の既存の枠組が反映していると思われるので、この点を補うもう一つの記事を引いておこう。「香港住居ノ唐人日本人ノ袖ヲ握リ吾等久ク韃妖ニ汚サレ短袖ノ夷服ヲ着セシカ以来ハ日本ノ如キ長袖ヲ着中国ノ衣冠ニ復ト云フテ日本人ヲナツカシク思フ様子ナリ」(筆者不詳『玉虫佐太夫ヨリ聞書』⁽²⁶⁾)。

中国人に「己ノ家ニ招」かれた日本武士の方でも直ちにこれに応じたようである。「清人ノ家ニ行ケバ茶ヲ盛り台ニ載テ出シ巻キ烟草ヲ出ス我邦ニ異ルコトナク食ハ米ヲ食フ」(『細川藩航行日記』)。職務上必要な限りでしか外国人に接しようと思はず、それまでバタバヤで華僑の訪問を受けた以外に中国人と交わつた様子のない使節団の高級官吏も、香港では勘頭組頭森田清行・徒目付刑部政好らが中国の両替店らしい店に赴いて、筆談で香港はじめ各地の貨幣価格について問うている(森田『亜行日記』二五八―二六〇頁。同じ筆記が益頭の『亜行航海日記』一八一―一八四頁にも写されている)。ジェームズ・レッジ (James Legge, 理雅各) が主宰していた英華書院も、雑誌『遐邇貫珍』の名と結びついて「我國ヘモ聞ヘシ学養」(玉虫『航米日録』二二―一頁) だったから、高級官吏から「従者」クラスまでが次々に訪れて「英文訳士支那人面会、遐邇貫珍・六合叢談ノ書ヲ買求メ」(名村『亜行日記』二七二頁) たり、咸臨丸の「従者」福沢がサンフランシスコの中国人書店で入手した『華英通語』を、ここで買う者もいた。

香港に集散する中国の現状についての情報の量は、バタバヤにおけるその比ではなかったから、一行は中国の旧体制の危機について、より新しくより詳しい情報をさまざまな接触を通して積極的に集め、集められた情報は、ナイヤガラ号に起居する日本人社会特に「探索」の志を抱く人々の間に、ただちに伝わつたようである。バタバヤでは一

月半から四〇日余り前の、英仏連合軍天津入城の段階までを知ることができた一行は、二週間の航海の後香港に到着すると入港早々に、一月前後しか経ていない、連合軍の北京接近と咸豊帝の熱河離宮への蒙塵（洋曆一八六〇年九月二二日、一行の日記に記入された邦曆では八月九日になる）、連合軍の北京入城（洋曆一〇月一三日、邦曆八月二九日）というニュースに接した。しかも太平天国軍の勢も盛んである。「先年以來起り居タル明末ト唱ヘシ流賊処々ヲ攻取リ中国過半其ノ手ニ入タリ、段々賊首モアレレ迂天洪ト申モノ一番ノ首トミエ年号ヲ太平天国ト改メ四方ヘ檄文ヲ伝ヘケレハ我先ニト降参イタス由、香港ヘモ檄文伝ハリ一本写シ歸レリ中国人皆々清朝ニ二百年來横領サレタルヲ憤リ迂王ヲ中華皇帝ト呼ヒ清帝ヲ韃妖ト唱ヘ此度仏ノ手ヲ飯リ二百年來中国ヲ汚シタル韃妖ヲ掃去ルトテ喜ヒ居ル由（『玉虫佐太夫ヨリ聞書』）。清朝支配についてあるいは「危キヲ累卵ノ如シ」（『細川藩航行日記』九月一日付）、あるいは「北京落城」（佐藤『米行日記』九月二二日付、五〇三頁）「コレニヨリテ清国ハ滅亡シタリト云フ」（『亜墨利加渡海日記』九月一七日付、七〇頁）という決定的な危機を見たのもきわめて自然だったと言えよう。

こうしたニュースは「……ノコトヲ聞ク」式に記されているので情報の出所ははっきりしない。中には香港の華字紙を読んだ同僚から聞いたことではないかと思われるものもある。そうした中で、情報源が明示されているものに、戦乱の現地から来た、乃至現地からの情報を聞いて来た、西洋人の伝える話がある。舟山列島から（木村『航米記』一一日付、三二二頁）、定海港からの英船（『細川藩航行日記』一三日付）、舟山から（木村『航米記』、「ベッキン」からの英船（『亜墨利加渡海日記』一七日付、七〇頁）といった風である。しかし、こうした中で「艦ニ來リ、新見君ト対悟（一語？）アリ、其中支那・英吉利兩國戦争ノ物語ヲナセリ」（福島義言『花旗航海日誌』（一一日付、三九四頁）という「米ノミンストル」の存在はきわ立っていた。

「此人乃チ北京府ニ在コト五年、当今新ミンストル来リ交代ナシ、此ニ退去ス、故ニ其戦争ノ収ヲ眼前ニ閲セン者ナリ」(福島『花旗航海日誌』三九四頁)。

というのは、臨時代理公使ビーター・パーカー革職の後をうけてアメリカ本国から全権代表として派遣され、英仏露代表とともに对清条約改正交渉にあたり、ジョン・ウエードに任務を引継いだウイリアム・リード(一八〇六—一八七六)であらう²⁷⁾。この人の北京駐在五年というのは明らかに誤聞だが、このような国際関係の渦中にいた人の口から出ることは権威をもって信じられ、日本の正使の口から語られた伝聞は、一行に速かに伝わったろう。リードの話は、英仏連合軍の華北侵入・北京接近、ロシア—おそらくロシア代表イグナチエフ²⁸⁾である—の居中調停による和平交渉と停戦、といった経過にすぎたようである。

咸豊帝蒙塵をひかえた北京とその周辺の流動する情勢についてのさまざまな情報の中で、リードのそれだけにだけ出て来る^{とくだね}特種的な情報として興味深いのは、英仏側の和平条件であらう。「(英仏側が—)難問ノ数ヶ条ヲ出ス、其一ニヲ記スニ、支那ノ帝王自ラ兩國ノ陣前ニ来、頓首再拜シテ和睦ヲ乞、其位ヲ退ギ、一族ノ人ヲシテ位ニ即カシムルトキハ、兵ヲ退ヘシ、其返答速カナラサレハ直ニ都城ヲ焼払シ、又和義^{ワニ}整フニ於テハ、国ヲ二ツニ割テ、西方ヲ英仏ノ属国トナスヘシト云々」(福島『花旗航海日誌』三九五頁)。中段の北京砲撃の威嚇は、あるいはトマス・ウエードが行なったものだろうか²⁹⁾。前段、後段はどこまで、どのような事実を、背景にしているのだろうか。いずれにせよこのような要求をつきつけられた清国皇帝の姿は惨めなまでに屈辱的である。これを聞いた正使新見正興が咸豊帝の人となりについてリードに質しているが、それは、清国皇帝が、彼の理解を絶する屈辱的な状況に追込まれたのは何故か、驚きと不審にたえなかつたからではなからうか。リードの答えはまた特徴的であった。「咸豊帝年齢廿八九、身体短少ニシテ、歩行ナス時ハ、其右ノ足ヲ引カ如ク、性質酒色ヲ好ミ、常ニ婦人ノ麗ナルヲ数百人傍ニ置テ、昼夜舞樂

ヲノミ專トシ、国家將ニ亡ントスルニ、猶一身ノ榮耀ヲ極ム、人アリ、之ヲ諫ムレハ直ニ禁錮スト語ラレリトナリ」(福島『花旗航海日誌』二九五頁)。この威豊帝の姿も、半ばステロタイプ化された「暗君」のそれであり、描きかたにはほとんどサディスティックなものさえ感じられる。

ともかく、監察小栗忠順の従者がこのように記したのと、ほとんど同じことが、リードに応接した正使の従者の日記(柳川『航海日記』三八四頁)にも、勘定組頭のそれ(森田『重行日記』二五六頁)にも記されている。また、おそらくこうした人々の語ったことが口から口へと語り伝えられて初めの出所が忘れたのだろう、同じタイプの、女性に耽る暗君威豊帝の姿は他の従者の日記にも現われる(玉虫『航米日録』一五五頁付、二二二頁)。また威豊帝蒙塵の記事にはしばしば「官女十三人ヲ携ヘ英人ニ禁錮セラレ」(同前)とか、「侍女十八人ト走り遂ニ英ニ執ル」(細川藩航行日記『一三日付』)とか、「帝自ラ其妃十三人ヲ連具シテ韃靼ノ別宮ニ遁レ去ト云」(福島『花旗航海日誌』一四日付、三九六頁)とか「当天子感豊帝ハ婦十三人を連れて立退んとせし所を英仏の軍卒に生捕られ右の婦人とともに」と間に押込有此上ハ英都ロンドンに送くるへしと云」(柳川『航海日記』一四日付、三八七頁)といったくだりがまるで表現の定型でもあるかのように現われる。伝聞がこのように流れ、その中で威豊帝について一つのステロタイプが出来上ってゆく過程の中には、アメリカの外交官の語った中国理解が、日本武士たちにとり疑いをさしはさまずに受け入れられ、流通し、そして、中国についての情報を受け入れる「引照基準」めいたものになってゆく様子がうかがわれるのではなからうか。

最後に、香港における遣米使節団の一行にとって、中国情勢についての有力な情報源となつたのは新聞だった。一行はこれまでして来たように、洋字新聞を入手して翻譯し筆写する努力も続けている(たとえば、森田『重行日記』二六二頁、香港出港当日の九月一八日の項には前日の新聞の抄訳が出ている)。しかし、香港に碇泊する一行にとつ

て新聞の中でも最も近づき易く、且つ精力的に収集されてもいるのは中国人による中国語の新聞だった。あたかも一八五〇年代の終り、香港や上海の、欧米宣教師団や商社の経営する洋字新聞・雑誌や華字雑誌を母胎として、中国人による華字新聞が生れ、中国の近代ジャーナリズムが出發しつづつあった。彼らは香港において、おそらく日本人としては始めて、このような草創期の華字新聞に接したのである。一行の一人が、『地理志』(『地理全志』であろう)を引くところによれば「此の街上に新聞紙局あり、支那人も西洋人に擬し、漢文を以て日日新聞を印刷して諸民に示せり」(佐野鼎『万延元年訪米日記』一六五頁)。そこで「市中にて船中のもの等漢字新聞を買へり、これ当四月頃よりのものにして、北京戦争の伝聞あり。因りて友人相互に借用して謄写せり。始より続きたる毎日の分は無しと雖ども、其の模様概略考ふべし」(同前、一六〇頁)。佐野の説明と符節を合せるような威豊九(一八五九)年八月一九日付、二九〇号から同年十一月二四日付、三三〇号までにわたって四号、威豊一〇(一八六〇)年四月二五日付、四一〇号から九月一四日付、四六八号までにわたって二三号についての、刻明な新聞記事の筆写が玉虫誼茂の『航米日録卷八』(二四六―二五八頁)に収められている。³⁰⁾また佐野も玉虫もともに志願「従者」、「有志者」で、使節団内部で一種同志的な交わりをもっていたこと³¹⁾から察して、玉虫も佐野のいう「友人」に含まれると考えられる。

この一連の新聞記事抄録には何故かもとの新聞の題名が一度も出て来ない。しかし、一方ではその発行日付と号数、刊行間隔(二、三日に一回)が明らかであり、他方では、中国近代ジャーナリズムの最初期で、中国人による華字新聞はきわめて限られていることから、問題の新聞は香港の孖刺報(China Mail)社から刊行されていた『中外新報』と考えてまずまちがいはないと思われる。この新聞は威豊八(一八五八)年、後年清朝末期の外交官となり、民国革命においては孫文を助けた、当時十代半ばの伍廷芳の提唱で二日刊の夕刊紙として創刊され、彼が中心となって刊行³²⁾されていた。玉虫の筆録は合計二七号分のしかも「抄録」だが、それだけでも「抄録」された報道の性格がかな

り明らかである。

先ず記事の情報源となったのは、地元香港の英字紙の記事、記者自身や英国人を含めた香港人士への来信、香港市内のうわさ、上海、天津、澳門さらにカルカッタ、英本国、アメリカ等からの商船が伝えた新聞、書簡、見聞談など広範囲にわたっており、中でも上海からのニュースが断然多い。従ってニュースの範囲も、中国の国内情勢について英仏軍の華北進攻（咸豊帝蒙塵から英仏軍の円明園破壊掠奪までフォロウされている）、太平天国軍の動向（とくに長江下流）、捻軍その他の「民変」、澳門「猪仔館」に拘禁された「猪仔客」⁽³³⁾の実力救出、海賊の出没等にわたったのみでなく、ヨーロッパ、アメリカからアフリカにまで及んでいた。ヨーロッパにおける英仏関係の緊張と英国の「義勇兵運動」⁽³⁴⁾、ナポレオン三世と第二帝制の対外政策、フランスのアンナン侵略、普墺戦争とビラフランカ条約、アメリカ西部の発展等々。また、後にふれる、日本の中国侵略についてのうわさも記されている。

このように情報源は多様であり、ニュースの範囲もぎわめて広がったが、記者はこれをただ集めただけではなかった。もちろんニュースの取捨選択、場合によっては中国語訳という作業がなされていたが、記者はそれにとどまらず情報の信憑性についてしばしばコメントを附して、慎重な評価をしていた。けれども、一連の記事の中で、その背後にいる記者の個性を感じさせるのは、時おり噴出して来るような、さまざまな出来事に対する記者の価値判断と、時には慷慨である。象徴的な一例を見よう。咸豊一〇年五月一二日付四一七号は、同月一〇日付の香港英字紙の記事を引いている。この記事は、前月四月一七日、两江総督何桂清が英公使ブルースに会って講和を交渉するとともに、蘇州を太平天国の占領から奪回するために英軍の力をかりようと「哀求」したことを指している。このすぐ後に次のような激語が続くのである。

「由此可知、何桂清無才之甚。既不能遺芳百世、亦不該將中国之大体取辱於外国。夫長毛之愚、乃中国内患、与英法毫不関涉。：英法豈有德何桂清之辭、派兵攻蘇州、代大清皇帝恢復之理。乃何桂清念不及此、猶自搖尾乞情、何其不明若是也」。

ここに見られるのは、第一に、新しいナショナルリズムである。記者は例えば、友人からの手紙を引いてピラフランカ条約についてのべ、戦いを交えたフランス、オーストリア兩國皇帝について

「二帝入一密房、商議兩國和好。章程妥議之後、二帝分別如兄弟。由此可見、泰西諸國戰鬥（一闘？）之規條、並無有陰謀詭計之事」（咸豐九年八月一九日、二九〇号）。

とのべている。また英本国の新聞を引いて、英本国に英国の華北侵略を批判する声が上がっていること、英国は清国皇帝を敵とするのでなく、太浩事件における「地方官無礼之罪」を責めるにすぎぬこと、をコメントをつけることもなく紹介している。こうしたところから考えて記者は、西洋諸国の国際関係やその中国に対する態度について、西洋の理念に従った見方を受けいれているようであり、彼の「不該將中国之大体取辱於外国」という憤りは、伝統的な攘夷思想からすでに切れているといえよう。ここで、伍廷芳は村の会堂の英国人老宣教師の講じる「欧州之政体文化」を聞いて心をとらえられ、それについて学ぶために香港に出てミッションスクールに学ぶにいたり、そこで『中外新報』の創設を首唱するにいたったという伝記の一幕も思いあわされるだろう。記者は、他方、たとえば中国人を殺害したフランス船員の犯人をかばうフランス領事を糾弾しているが、それは「法律」の名においてなされていた（八月二七日、四六一号）。

第二に、このような新しいナショナルリズムの主張が、無能無識のゆえに国辱をまねく、清朝の官僚あるいは清朝統治体制、に対する批判と結びついていることも明らかであろう。八月二〇日付、四五八号は、シリアにおける回教徒のキリスト教徒大迫害のニュースを紹介した上、これに対して、トルコ王は「不肯力弁、皆謂此乃鄉民相鬥小事」だ

として、しかるにフランス皇帝は「震怒し」て回教徒問罪の兵を出さんと欲していることを述べている。記者はこのような中東をめぐる国際政治の記事の間に、華南の土着の住民が「客家」のために大迫害を受けたおり、前の两江総督黃忠（一宗）漢は「土（一上？）表亦以此為小事。但不思此等小事、已殺戮數萬人民、村庄被焚者不計其數矣」だったというコメントをすべりこませるのである。彼の脳裡では、人民の被害に対して鈍感で無責任なトルコ皇帝のイメージは、ただちに清朝地方高官のそれを呼び出しそれとダブったものではなからうか。九月一二日付四六七号は、上海の新聞報道として、山西省太原で、官憲の軍費とり立てが荷酷なため住民の反抗が始まっていることをのべて、「此皆因清朝不信守和約、与英法互動干戈、勢不得不迫籌軍餉所致也」ということばを引いているが、こうした清朝の統治の根本に対する批判は、すでに見たような個々の清朝官僚に対する批判と結びつくものではなからうか。

第三に、記者は清朝官僚の無能と無責任に批判的だったが、そのことは、反乱した太平天国軍に対する好意とは無縁だったようである。「長毛之愚」という表現はそれを示しているといえよう。同じ九月一二日付の記事は、山西の民乱について記した後、次のような激しい危機感の吐露で結ばれている。

「余因之有感矣。夫江南已被長毛割拠者多年、広東則為英法挾制者數載、江北有捻匪之擾、四川有石達開之擾、又況目下英法逼近皇都、加以山西太原民變。正所謂災害並至、雖有善者亦無如何之矣。乃國家方凜累卵之危、而庶民猶極耳目之樂、各処開場演戲、時事漠不関心。人心向背從可知矣。有心世道者、當如何扼腕哉」。

このような記者のコメントから、この新聞は、事実の報道を基調としていたが、編集の背景には、はっきりとした政治的立場が脈打っていたことがうかがわれよう。それはおそらく、中国沿海の西洋植民地や条約港における外圧や新しい文化の影響をくぐる中で西洋の政治や文化に眼を開かれ、それに刺戟されて中国の旧体制を批判しつつ、西洋の脅威に対して国を守ろうとする、新しいタイプの知識人のそれであった。⁽⁸⁶⁾ この新聞を回覧し筆写した日本の「有志

者」たちは、このような中国知識人の目を通して中国の生々しい現実を見ることになったのである。

以上、冗長をいとわず、遣米使節団の一行が、太平洋の東・南・西にわたって、おそらく予期せぬ副産物として、当代の中国と中国人を知るにいたったことをのべ、中国人とその社会をうかがったのぞき穴がどのようなものだったか、中国についての情報を集めた通路はどのようなものだったかを概観した。その際中国人たちは、日本にどのようなイメージを抱き彼らにどのような態度を示したのか、また日本武士たちは中国人にどのような態度を示し、どのような中国像を持つにいたったか、情報伝播の経路の検討からそこを通じて伝えられた情報の内容をとらえることが次の課題である。

- (1) 中村栄孝「大君外交の国際認識——華夷秩序のなかの日本——」、日本国際政治学会編『日本外交の国際認識その史的展開』、『国際政治五一』一九七四年一〇月、所収。
- (2) 千歳丸の一行の中国見聞については、衛藤藩吉「日本人の中国観——高杉晋作らの場合」(福島正夫編『仁井田陞博士追悼論文集第三卷 日本法とアジア』一九七〇年、所収)、市古宙三「幕末日本人の太平天国に関する知識」(同著『近代中国の政治と社会』増補版)一九七七年、所収) 参照。
- (3) 徳川時代を通じる華夷観および中国観については、植手通有「日本近代思想の形成」一九七四年、二三五—二四四頁参照。
- (4) 中村栄孝、前掲論文、一一一—一八頁。
- (5) こうした中国および在華西洋人宣教師の著作の日本における大きな影響については、中山久四郎「東西歴史上の阿片に就て、附阿片問題」(『史学雑誌』二二編二号、一九一一年)、「近世支那の日本文化に及ぼしたる勢力影響」(一)〜(八)、『史学雑誌』二二編一、二、七、八、一一号、二六編二号)、「近世支那より維新前後の日本に及ぼしたる諸種の影響」(同著『読史広記』一九三三年、所収)、増田涉『西学東漸と中国事情』一九七九年刊行予定などを参照。
- (6) この点について参照、拙稿「さまざまな西洋見聞」(沼田次郎・松沢弘陽編『西洋見聞集』一九七四年、所収) 六二—六二五、

六四〇—六四二頁。

- (7) 前掲『西洋見聞集』所収。以下引用については、初出の場所で、筆者・出典について注記し、それ以後に略記する。
- (8) 木村鉄太『航米記』肥後国史料叢書第二卷、一九七四年。
- (9) 日本史籍協会編『野史台 維新史料叢書八』一九七二年。
- (10) 益頭は普請役。日記は日米修交通商百年記念行事運営委員会編『万延元年遣米使史料集成 第二卷』(以下M G IIのように略す)所収。
- (11) 名村は定役格通詞、日記はM G II所収。
- (12) 柳川は新見正興の家従。日記は、日本史籍協会『遣外使節日記纂輯一』(以下K S Iと略す)所収。
- (13) 佐野は益頭尚俊従者、加賀藩士。日記は、金沢文化協会『佐野鼎遺稿 万延元年訪米日記』一九四六年、所収。
- (14) 福沢の『増訂華英通語』(全集第一卷所収)凡例、参照。
- (15) 吉田常吉編『航海日記』一九五九年。
- (16) M G II所収。
- (17) M G III所収。
- (18) 前掲「さまざまな西洋見聞」六三四頁参照。
- (19) 同前、六三六頁、および村垣『航海日記』参照。
- (20) M G I所収。
- (21) K S I所収。「万延元年遣米使節年表」(M G VII一〇一頁)は玉虫誼茂ではないかとする。しかし、佐藤日記の記事と玉虫の『航米日録』の記述とは必ずしも一致せず、後考を待つ。
- (22) 筆者が見たこの記事の筆写は全て六月一二日となっており、一連の戦闘が六月中の出来事であるように読めるが、恐らく誰かが八月とすべきところを誤記し、それを次々に転写したものと思われる。これを八月とすれば記事中の日付は全て太沽攻防のそれに一致する。

(23) 内容・文体から推して筆者はおそらく木村鉄太だろうと思われるが署名はない。東京大学明治新聞雑誌文庫所蔵吉野作造博士旧蔵写本による。

- (24) これも同じく東京大学、明治新聞雑誌文庫所蔵吉野博士旧蔵写本による。
- (25) 明治新聞雑誌文庫所蔵吉野博士旧蔵写本。
- (26) 『西洋見聞集』二四九―二五一頁所収の「太平天国 庚申 年 月 日」と記されたものが、これではないかと思われる。なお庚申は一八六〇年、太平天国一〇年である。
- (27) リードとその条約改正交渉については、坂野正高『近代中国政治外交史』一九七三年、二三八頁以下参照。
- (28) イグナチェフについては、第二節で、文久二年遣欧使節団との関連においてふれる。
- (29) 坂野『近代中国外交史研究』一九七〇年、一九三頁参照。
- (30) その他にも、益頭の『亜行航海日記』一〇日付、一七一頁には同じ新聞の九月一四日分が記されている。
- (31) 拙稿「さまざまな西洋見聞」六二四―六二五頁。
- (32) 『中外新報』とくにその創刊の年については、戈公振『中国報学史』一九三五年（一九六四年再版）一〇二―一〇五頁による。玉虫の新聞記事抄録の内容とそのオリジナル及び伍廷芳については、もっぱら北海学園大学法学部藤岡喜久男教授の綿密な調査と御教示に負う。
- 伍廷芳は一八四二年生（生没年については諸書異なるが、Paul A. Cohen, *Between Tradition and Modernity*, 1974, Harvard University Press. の伍廷芳略伝による）、一九二二年没。父は広東省新会県の人。科挙受験を捨てて村の英国宣教師に学んで影響を受け、香港に出てミッションスクール聖保羅書院 (St. Paul's College)、皇后大書院 (Queen's College) に学んだ。『中外新報』創刊のために働いたのはおそらくこの頃と想像される。また同治三、四（一八六四、五）年頃には新しい華字新聞『華字日報』の創刊を助け、同治一・二・三（一八七三、四）年には香港における洋務派知識人の指導者王韜を助けて『循環日報』創業の事業に携わった。そうした意味で伍廷芳は、中国近代ジャーリズムの草創期に大きな寄与をなした西欧派知識人の一人だった。その後彼は、キリスト教会の援助でロンドンに渡り、リンカーンズ・インに学んで帰国、一八八七年には香港政庁に勤務したが、やがて総督と対立して辞職。後、清朝に出仕して、日清講和会議随員となり、駐米・駐スペイン・駐ベルギー公使を歴任した。辛亥革命に当っては革命派に投じて孫文を支持するにいたり、一九一七年以後は孫文の政友として行動をとらした。伍廷光編輯『伍廷芳』一九二二年（沈雲龍教授主編『紀念中華民國建國六十周年史料叢刊 15』所収）及び、戈公振『前掲書』Cohen op. cit. による。
- 伍廷芳についてはなお Linda P. Shin, *China in Transition: The Role of Wu Tiengfang (1842-1922)*. Ph. D. dissertation.

University of California (Los Angeles), 1970. があるが筆者未見。

(33) 一九世紀中葉、華南からペルー・キューバ向けを中心の「契約移民」の送り出しが活発になった。これは実質上、奴隷貿易の変型であり「苦力貿易」(Coolie trade)として、ついには国際問題化するまでにいたった。「猪仔館」は誘拐された「苦力」を「苦力船」にのせるまで拘禁しておく監獄式の収容施設で、澳門のそれは特に悪名高かった。

(34) 文久二年遣欧使節の報告書「英国探索」にもこれがのべられている。私の注および解説『西洋見聞集』四九七、六五一頁) 参照。

(35) いわゆる「本地」と「客家」の「械闘」を、このように後者の前者に対する圧迫のように見るところにも、記者の立場が現われているように思われる。いわゆる「土客械闘」の問題について、市太宙三、前掲書七―八頁及び中川学「華人社会と客家史研究の現代的課題」(戴国輝編『東南アジア華人社会の研究』上、一九七四年所収) 参照。

(36) この点について、中国の改革から革命へのダイナミズムを、西洋の衝撃を受けとめる沿海地帯と後背地帯との二つの文化の間の相互作用から説明しようとするコーヘンの試みには示唆に富む。cf. Cohen, *op. cit.*, esp. Part IV. (未完)

一九七八・九・二四